

徒然草第四一段私見

細谷直樹

(要旨)

徒然草の第四一段は兼好の直接体験をそのままに記し付けた事実談として記されている。ところが、その記事内容はいかにも不自然なものである。事実談なのに、なぜこんな不自然なことが記されているのか。あるいは、これは全くの架空談なのか。これまでも本段の記事内容に疑問は持たれていたが、どうもうまく読み解けなかった。本稿は、まず先学の本段に対する読みを検討し、次に、本文の読みを、特に語気語調に注意を向けることによって深め、さらに、前後の章段配列の中で本段を捉えることから、五月五日に賀茂の競馬を見物した、その日の兼好の事実としての体験と、それが筆にされた今見る第四一段の記事との間のずれを指摘し、そこにはたらいっている兼好の創作意識を浮び上らせることによって、この疑問を解いた。

なお、徒然草の作品世界を、前稿では、円論で論述したが、この円のかたちで捉えられる徒然草の作品世界の枠組みの中に、序段を含めての徒然草の二四四段を位置づけると、第四一段はどのような意味を持つのかを考えることによって、今後の徒然草研究にひらけるであろう新しい面、すなわち、これまで徒然草が随筆であることを自明のこととして、その随筆という枠を取りはずすとき、はじめてひらけてくるであろう新しい研究領域を予見した。

「徒然草の中の兼好の直接体験を記し付けた章段に見当る不自然な内容についての考察」(国語国文昭和49・11)で、第一段・第三二段・第四一段の三段を取りあげて、兼好自身の直接体験として記されているこれらの章段の内容が、事実談として読み取れば、いかにも不自然なものであることを示し、なぜこんな不自然な内容が記されたのかを、視点の移行というところで説明した。第一段・第三二段に対する疑問は視点の移行で説明し得ると今も思う。しかし、第四一段の不自然な記事内容をも視点の移行で説明し切ることには無理があるように思えてきたので、改めて第四一段の究明を試

みたい。

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雑人立ち隔てて見えざりしかば、おのおの下りて、埒のきはに寄りたれど、ことに人多く立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。かかる折に、向ひなる棟の木に、法師の、登りて木の股について、物見るあり。とりつきながら、いたう睡りて、落ちぬべき時に目を醒ます事、度々なり。これを見る人、あざけりあざみて、「世のしれ物かな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ」と言ふに、我が心にふと思ひしままに、「我等が生

死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」と言ひたれば、前なる人ども、「誠にさにこそ候ひけれ。尤も愚かに候」と言ひて、みな後を見かへりて、「ここへ入らせ給へ」とて、所を去りて、呼び入れ侍りにき。

かほどの理、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの、思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず。

(本文は光広本八慶長一八年刊、古活字版を底本とした日本古典文学大系本による。)

周知の第四一段である。本段が、その記事内容で、いかにも不自然と思われるのは、次の二点である。

(1) この場の状況を思うと、前を立ちふさいでいた雑人が「自分たち(「あなたとわたし)の方がもっと馬鹿だぞ」と言われて、「はい、そうでした。どうぞこちらへ」と言っ、前の席をあけるか。

(2) 「自分たちの方がもっと馬鹿だぞ。競馬など見ていて」と言った御本人が、「どうぞこちらへ」と言われて、のこのこあけてくれた席へ入って行くというのは、どういう神経からか。しかも、「かほどの理、誰かは思ひよらざらんなれども、……」と書き付ける兼好の得意満面の語気口調は、自分の言ったこととしたことの矛盾に彼が全く気付いていないことをはっきりと示していよう。「見えずぎる目」を持つとされる兼好も、自分のことになると、こんなにも見えなすぎることか。

ところが、古注も新注も、ながく第四一段を事実談として疑わなかったのは、次の三点からのことと思われる。

(1) 五月五日の賀茂のくらべ馬の折のことと、時と場所が明記されていること。

(2) 内容は自讃の記事であり、記事の中に兼好自身が登場すること。

(3) 第一〇段・第六六段・第一六三段・第一七七段・第二一六段などで、「き」と「けり」が使い分けられていること(第一〇段でいえば、「鳶あさせじとて繩を張られ」た、例の事件を叙した箇所、後徳大寺と西行に関しては「けり」で叙し、綾小路宮に関しては「き」で叙していることが、兼好の生存年代と矛盾しないこと)から、徒然草では、兼好は自分の直接の体験は「き」で回想し、間接の体験は「けり」で回想しているものと解される向きが強いが(注1)、第四一段は「き」叙述の章段であること。

理由をあげて第四一段の不自然な記事内容を説明した最初の人は安良岡康作氏である。氏は『徒然草全注釈』上巻(昭和四二年二月刊)の第四一段の「解説」の中で、次のように言われている。

見物人を感じ入らせた、彼の一言は、死の到来が、この現在の瞬間にあるかも知れないのを忘れて、競馬見物に日を暮らす、その愚かさを指摘したのである。にもかかわらず、彼は、「埒のきは」に呼び入れられて、見物の一人として、「物見て日を暮す」人間になってしまっている。この矛盾はどう説明すべきであるか。橘氏も、『通釈』では、「感心してどいてくれた人の跡へ、のこくは行って行って競馬を見物してゐた彼を想像すると、むしろ無反省な自讃と言はねばなるまい」と評しておられる。わたくしも、彼のこの「無反省さ」を長い間問題にして来たのであるが、このごろ、一つの解決案を思いついたの

で、ここにそれを記して、将来の研究のために提供しておきたいと思う次第である。

賀茂の競馬は、注釈書の多くは、毎年五月五日に行なわれる行事のように説いている。しかし、確かな史料によると、必ずしも、この日に催されたとは限らない。弘安三年（一二八〇）は五月五日に行なわれた（『統史愚抄』）が、兼好の生まれる以前のことであるから問題外として、兼好の生年といわれる弘安六年（一二八三）は五月五日に、六歳といわれる正応元年（一二八八）には五月一日に（『実躬卿記』、『統史愚抄』）、九歳といわれる同四年（一二九一）には五月一日に、同五年には、五月二日に行なわれている。『実躬卿記』正応五年五月の条には、

朔日、晴、自他幸甚々々、今日賀茂御馬馳、依訴訟延引云々。

二日、晴、賀茂御馬馳、今日被行也云々。

とあって、このころは五月一日に行なわれるのが通例であったように記されている。（南北朝期に入ってから、また、ものように、五月五日に行なわれるようになったことが知られている）。それならば、本段のように「五月五日」に行なわれたのは何年のことかという、永仁三年（一二九五）であって、この時は、『実躬卿記』によれば、その五月の条に、

一日戌。雨下。朔日幸甚々々。且其雨頗殊勝。（中略）今日、依雨休息。賀茂社御馬馳、依雨延引云々。

五日寅。陰。今日賀茂競馬也。予入風炉西刻許連出。於下社御所屋辺、自賀茂婦洛人々見物。此間雨下。風立飼逸物人

々飛車濟々。無量見物也。就中、前藤大納言爲氏、高倉三位公兼、子息長嗣朝臣、高二位入道藤口、花山院中納言藤藤、左少弁爲行等、菅原在綱朝臣、出立殊勝々々驚耳目者也。入夜降雨。洪水過法云々。

と記されている。わたくしは、この競馬が通説のように、必ずしも五月五日に行なわれるものではなく、五月一日の方がむしろ常例であった時期があったことを強調したい。したがって、五月五日に行なわれた永仁三年度のことは当時としては例外であったことになる。そこで、本段の始めに「五月五日、賀茂の競べ馬を見侍りしに」とあるのは、あるいは、この永仁三年のことではないかとも推測されてくる。この年は、通説における、兼好出生の弘安六年（一二八三）から数えて、十三年目に当たる。したがって、彼が競馬見物に出かけ、その雑踏の中で、棟の木の股で居睡りする法師を見物衆が嘲る声を聞くや、「我等が生死の到来、たゞ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」と言い放ち、それが前にいた人々を感動させて、「誠にさにこそ候ひけれ。尤も愚かに候」と丁寧言い、「ここへ入らせ給へ」という態度の変化を起こすに至ったのも、十三歳の少年から思いがけない一言を聞いたがためであったのではあるまいか。「所を去りて呼び入れ侍りにき」とあって、兼好が見物を続行しているのも、そうした年齢であれば、不自然な成行きとも言えなくなる。下級ではあっても、とにかく貴族の子息であり（父は治部少輔、卜部兼頭）、牛車に乗って見物に行くほどの格式を備えていることから、見物人たちのことばの丁寧さも理解されてくる。

なお、本書の最終の第二四三段において、「八つになりし年」に、父に「仏は如何なるものにか候ふらん」と尋ね、ついに、「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ」と父に言わせているところを見ると、兼好の中に、仏道につき、宗教についての関心はかなり早くから芽ばえていたことが知られ、この段のごとき言辭を言い放ったことも、けっして、不自然・不相应なこととは言えないと思う。当時の十三歳の間は、現在よりもかなり成熟していたと考えられるからである。(二〇一〜二〇三ページ)

「みごとな考証である。ただ単に『五月五日賀茂の競馬』とあるのを、永仁三年の出来事とつきとめたのは、考証にすぐれた『全注釈』の著者の殊勲である」(井手恒雄著『徒然草通説批判』八昭和四四年一〇月刊V四二ページ)と、安良岡氏の考証は高く評価され、第四一段の記事内容の不自然さも氷解したかに一時は思えたが、斎藤彰氏が「徒然草の考察」(『中世文学』昭和51・10)で、内閣文庫蔵『実躬卿記』を再調査されたところ、五月五日の賀茂の「競馬」は安良岡氏の指摘された弘安三年(一二八〇)・同六年(一二八三)・永仁三年(一二九五)以外、正応五年(一二九二)・正安四年(一二三〇)にも行われており、さらに五月一日に行われる「馬馳」(「足揃」ともい、五日の「競馬」のため、参加馬の試験をこころみ、二頭一組の取組みを決める催し)を安良岡氏は五日の「競馬」と誤って読み取っていたことも判明したため、氏の新見で第四一段の不自然な記事内容を読み解くことにはかなりの無理のあることが明らかになった。今日の読みとして最もすぐれたものは、この間の事情を踏まえて示された桑原博史著『徒然草の鑑賞と批評』(昭和五二年九月刊)の次の読みであると思う。

安良岡康作氏『徒然草全注釈』上巻は、この行事の実施について、一つの仮説を述べている。すなわち、兼好生存のころの行事として、賀茂の競馬は五月一日に行われたり二日に行われたりしているが、本段のように五月五日に行われたのは永仁三年(一二九五)で、この年兼好の推定年齢は二三歳であった、したがってこの章段は、幼時の追憶談ではないか、というのである。

しかしその後、歴史資料を精密に調査した結果、五月一日や二日に行われるのは馬馳(一種の予行練習)で、競馬ではないこと、競馬は永仁三年以外の年でもほとんど五月五日に行われていたこと、が明らかにされている(斎藤彰氏「徒然草の考察」中世文学二一号昭和五一年一〇月)。

したがってこの話もせいぜい、出家後の経験を回想しているもの、と漠然と考えた方がよさそうである。(中略)

問題は、こういう応酬のあと、人々が「ここへ入らせ給へ」といって場所をあげて、兼好(たち)を呼び入れた、それに従って兼好もともに見物した、と解される行為であろう。

これについては、ほとんどの注釈書が、人々が場所をあげたところへのこのこはいつて競馬を見物する彼の姿に、無反省さを感じている。この話を兼好一三歳の時の経験を推測する安良岡氏の説も、少年ならばその無反省に見える行為も認められはしまいか、という考えから発しているのであった。けれども、私は、これは矛盾ではないと思う。

兼好が、ふと心に思い浮かぶままに言った「われらが生死の到来、ただ今にもやあらん……」のことは、これだけを抽出すると、いかにも深遠な真理を秘めているようだ。しかも

ともと、兼好は賀茂の競馬を見に来たのであった。この一言には、見物の人々を説法するような気持ちはなかったはずである。

しかもこの一言は、木に登って居眠りしている法師を笑った人々に対してのみ、言ったことではない。この「物見て目を暮す」愚かな人々の中には、兼好自身もはいつている。他者を批評するよりも、自分自身の内省のつぶやきとして言っているのである。

他への説法としてより、むしろ述懐的にいわれてこそ、このことばは生きる。愚かしさを知らずに見物することは、たしかに悪い。しかし愚かしさを知って見物をやめる、というのは、あまりに非人間的道德感ではないか。愚かしさを知ってなおかつ見物するところに、人間らしさも見物の興も、ひときわ高まる。

だから見物人は、この一言に真理を見いだして、木に登って居眠りする僧を嘲けることはやめよう。あの僧も自分たちも同じ愚者だ、と認識するからである。しかし物見るとはやめはしない。同時に、自分たちと同じ立場で、愚かしさを知りつつ見物にやってきた兼好（たち）を追い払いほしくない。愚かな仲間同志の親愛感をもって、場所をゆずり合い、誘うのである。こういう時、誘いをことわって帰るのを、野暮やぼという。

兼好は、親愛感にみちたその場の雰囲気をごわすような愚人ではない。ともに見物して楽しんで生きることこそ、最良の態度であることを知っている人である。矛盾とも無反省とも評される兼好の言動は、こういう人間観から発しているのではあるまいか。

つぶやくようにいった一言が、その場の雰囲気をこれほどよくする効果を考えると、その一言が自分の口から出たことに、はにかみを感じざるを得ない。そこで書き添えたのが、

かほどのことわり、誰かは思ひよらざらんれども、折からの思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず。

という結びの文章である。

兼好は、めったに自画自讃をしない。自分がよき一言をいうよりは、他者の中によき一言を発見する人である。にもかかわらず自分が主役的な役割りを果たしてしまったこの章段を書き記すにあたって、こういうはにかみの自己弁護をしたのであった。(三三―三七ページ)

桑原氏一流の柔軟な読みであり、教わるところは大きい。しかし、氏の読みは兼好の言動をその結果からながめて好意的に理解しているものであって、その結果に至る道筋のところに読みの加えられていない点、また事実としてそう発言し行動したのであろう生身の兼好の言動とそれが作品世界の中の自身の言動として書き留められたときのずれが読み取られていない点に不満が残る。

桑原氏は「もともと、兼好は賀茂の競馬を見に来たのであった。この一言には、見物の人々を説法するような気持ちはなかったはずである」といわれる。確かに、この場の状況を思えば、説法口調で「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て目を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」など、お説教のできようはずはない。そんなお説教をしようものなら、雑人たちの怒りを買って追い出されるのが落ちである。事実在即すれば、確かにこの一言には見物の人々を説法するような気持はなかったはずであ

る。ところが、書き留められた表現に即すれば、説経唱導家の口振りを思わせる説法口調であるということは、この一言は、事実から虚構の場に転移された、その文章世界の中で筆にされたということなのであり、この文章世界の中の殊更に構えたポーズが書かせた一言と読まねばならぬことを教えてくれている。この一言は文章世界の中で発言されたものであって、現実の中でこのとおりに発言されたものではない。

「他者を批評するよりも、自分自身の内省のつぶやきとして言っているのである。他への説法としてより、むしろ述懐的にいわれてこそ、このことばは生きる」。私も前論（国語国文昭和49・11）で指摘したが、事実としては、つぶやきに近い小さな声での発言であったろう。小さな声での発言にしろ、この場の状況を思うと、こんな危険な発言をさせたのは、前を立ちふさがれてよく見えない不満と立ちふさぐ見物人を「雑人」と見下す兼好の階級意識が頭をもちあげてのことであつたらうが、その一言が思わぬ結果を引き起こし、特等席で競馬見物を楽しんで帰ってから（その日に、あるいは後日）このことを筆にするとき、それが説経唱導家の口振りを思わせる説法口調の発言に姿を変えているのはなぜか、こそが問われねばなるまい。

「自分たちと同じ立場で、愚かさを知りつつ見物にやってきた兼好（たち）を追い払いはしない。愚かな仲間同志の親愛感をもって、場所をゆずり合い、誘うのである。こういう時、誘いをこわって帰るのを、野暮という。兼好は、親愛感にみちたその場の雰囲気をごわすような愚人ではない。ともに見物して楽しんで生きるこそ、最良の態度であることを知っている人である」。あげ足取りになるかも知れぬが、愚かさを知りつつ競馬見物にやって来る馬

鹿はいない。来たのは見たかったからだけのことで、もし来てよい席が取れたなら、居眠りする僧を嘲ける雑人のことばを耳にして、「我等が生死の到来、……」の説法的発言はなされなかったことだろう。帰らなかつたのも、帰れば野暮になるからでも、彼がそんなことをする愚人でなかつたからでもなく、来たのは競馬が見たくて来たのであり、思いもかけず自分の一言から席があげてもらえて、うれしくてならず、どうも有難うという単純にして至極当然な感謝の気持からしてのことであつたのだろう。そうだった結果からその言動の意味を捉えたのでは、正しくその意味を捉えることはできぬと思う。

「かほどの理、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの、思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず」は「はにかみの自己弁護」の筆であろうか。「つぶやくようにいった一言が、その場の雰囲気はこれほどよくする効果を考えると、その一言が自分の口から出たことに、はにかみを感じざるを得ない」。事の展開の上に兼好の気持を置けば、こうも考えられよう。しかし、はにかみの自己弁護の筆と桑原氏が受け取られた「かほどの理、……」は、その語気語調の上からはそうは考えさせまい。「誰かは思ひよらざらんなれども」のような中世まるだしの表現、「物に感ずる事なきにあらず」のよるな自信に満ちた断定口調は含羞とは縁がない。はにかみの気持が働いたなら、「かばかりの理は誰も思ひよることならめど、折からの思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人は木石ならねば、時に物に感ずるならし」あたりの表現になつたはずである。事実としてその発言し行動したのであろう生身の兼好の言動とそれが文章世界に転移された場合のずれに注意すべきであろう。

徒然草の章段配列に関して、従前の逐段執筆説に対し、「不具なるこそよけれ」の美感に基づく兼好自身の手による意図的編集説を、「徒然草の章段配列をめぐって」（国語と国文学昭和46・7）で主張したが、それは徒然草の章段配列の枠組みが何を意図して組まれたかを明らかにしたものである。「不具なるこそよけれ」の美感に基づいての章段配列だからといって、徒然草の全段が不具に配列されているわけではない。全段が不具に配列されていたとしたら、不具というかたちの一具の配列ともいえる。不具なるものは一具なるものを逆に陰影にすることによって、その特異な美が輝き出すのであり、徒然草に連想の糸でつながる章段の多いことはすでに諸家の例示されることである。第四一段の前後の章段を連想の流れの中で読み取ると（40・41・42・43・44の章段配列は、烏丸本系統・正徹本系統・幽齋本系統は同じ）、第四二段は「不具なるこそよけれ」の美感に基づいての配列で、前後の章段とは連想の糸が切れるが、第四〇段・第四三段・第四四段は創作意識を働かせての筆の跡の明瞭な章段であり、その配列は意図的であるように思える。

第四〇段が、「因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて、……」と、「因幡国」の国名を明示して起筆したことに関して、三木紀人氏はシンポジウム『中世の隠者文学』（昭和五一年六月刊）の中で、次のように発言しておられる。

因幡国というのは歌枕で、例の在原行平の「立ち別れいなばの……」以来、離別を連想させる地名になっていますね。『和歌初学抄』に「人ノイヌルナドニソフ」とある。そういう作例の一つに「京に侍りける女子を、いかなる事か侍りけむ、心うしとて留め置きて、因幡へまかりければ、むすめ、うち捨てて君しいなばの露の身は消えぬばかりぞありと頼むな」という父娘

の交情を思わせる歌が『後撰集』にあります。そうしたものを背後に置いて見ると、栗しか食わぬ娘の奇癖をたてにして結婚させなかった父の話というのは、愛娘との別れに耐えられなかった父の我儘という一面が隠し絵のように浮かび上がってきて、二六段などの主題の別れ、さらに誇張して言えば、別れを演出する「時」というものへの兼好の心情がすけて見えなくもない。（二〇八ページ）

第四三段の「春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥ふかく、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過ぐしがたきを、さし入りて見れば、南面の格子、皆おろしてさびしげなるに、東に向きて妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年廿ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなるさまして、机の上に文をくりひろげて見ぬたり」と第四四段の「あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色あひさだかならねど、つややかなる狩衣に、濃き指貫、いと故つきたるさまにて、ささやかなる童ひとり具して、遙なる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつつ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送りつつ行けば、笛を吹き止みて、山のきはに惣門のあるうちに入りぬ」の二段を、枕草子の第一九〇段の「南ならずは、東の廂の板の、影見ゆばかりなるに、あざやかなる畳をうち置きて、三尺の几帳のかたびらいと涼しげに見えたるを、おしやれば、ながれて、思ふほどよりも過ぎて立てるに、白き生絹のひとへ、紅の袴、宿直物には濃き衣のいたうは萎えぬを、すこしひきかけて臥したり」と第一九一段の「大路近なる所にて聞けば、車に乗りたる人の、有明のをかしきに、簾上げて、『遊子なほ

残りの月に行く」といふ詩を、声よく誦したるも、をかし。馬にても、さやうの人の行くは、をかし」の二段と読み比べ、さらに第一八八段の「好き好きしくて独り住みする人の、夜はいづくにかありつらむ、暁に帰りて、やがて起きたる、ねぶたげなるけしきなれど、硯取り寄せて、墨こまやかにおしすりて、事なしびに筆に任せてなどはあらず、心とどめて書くまひろげ姿も、をかしう見ゆ。白き衣どもの上に、山吹、紅などぞ着たる。白きひとへのいたうしほみたるを、うちまもりつつ書き果てて、前なる人にも取らせず、わざと立ちて、小舎人童、つきづきしき隨身など、近う呼び寄せて、ささめき取らせて、去ぬる後も久しうながめて、経などのさるべきところどころ、忍びやかに口ずさびによみたるに、奥の方に、御粥、手水などしてそのかせば、歩み入りても、文机におしかかりて、書などをぞ見る」によって、第一九〇段の女性を第一八八段の男性と入れ替えてみよう（枕草子の章段数は角川文庫本のそれによる）。一段ずつの類似ならともかく、二段つづけての類似は偶然のこととは思えない。徒然草の第四三段・第四四段は枕草子の影響下にある習作的小品と読み取って間違いないことと思う。

右の第四〇段・第四三段・第四四段の章段配列の中に第四一段を位置させると、本段にもまた創作意識が濃厚に働いていることが見えてくる。

「五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに」と起筆した「五月五日」と向ひなる「棟の木」を結びつけるものが枕草子の第三五段「木の花は」の中の「木のさまにくげなれど、棟の花、いとをかかし。かれがれに、様異に咲きて、かならず五月五日にあふも、をかし」であることは、古注の『文段抄』がはやく指摘しているところであるが、「向ひなる木に」だけでもよいところを、「向ひなる棟

の木に」と木名を明示し、「五月五日」と交響させたのは、枕草子を介在させての創作意識を働かせての筆であることは間違いない。

「木の股についで、物見る」法師に問しても、古注の『徒然草句解』は「此の所、鳥窠禪師の故事思ひ合はせ見るべし。五灯会元曰、鳥窠道林禪師木郡富陽人。秦望山有長松。枝葉繁茂、盤屈如蓋。遂棲止其上。故時人謂之鳥窠禪師。元和中、白居侍郎入山、謁師問曰、禪師住処甚危險。師曰、大守危險猶甚。白曰、弟子位鎮江山。何險之有。師曰、薪火相交、識性不停。得不險乎」と記し、それが鳥窠禪師と白樂天の問答を踏まえての筆であることを指摘している。この問答は沙石集卷五の「学生解怨事」の中にも記載されており、知識層の智囊の中の故事であつたらしい。

ところで、この鳥窠禪師と白樂天の問答は、その居所累卵の危うさを問題にしているのに対し、徒然草の本文では、見物人は木の股に「ついで」法師の居所の危うさを笑うが、兼好は居所の安危から転じて、無常のこの世において競馬にうつつを抜かす愚かさを指摘している。見物人と兼好とのやりとりは鳥窠禪師と白樂天の問答の内容そのままではない。居所累卵の問答から無常の理の明示へと筆を転ぜさせたのは兼好に創作意識が働いてのことではなかったか。このことは、本文の「我が心にふと思ひしままに」が何を「ふと思ひしままに」なのかを追究することによってさらに明白になる。

「我が心にふと思ひしままに」は、「我が心に（次のことを）ふと思ひしままに」の気持からの筆で、次に口にされた「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」の内容を念頭にしているものと解

するのが、手元の注釈書に見当る常識的な読みであるが、この気持からの筆であったとしたら、第二三八段の自讀七箇条の第二条には、「当代、いまだ坊におはしましし比、万里小路殿御所なりに、堀川大納言殿伺候し給ひし御曹司へ、用ありて参りたりしに、論語の四・五・六の巻をくりひろげ給ひて、『ただ今御所にて、紫の朱うばふことを悪むといふ文を御覽せられたき事ありて、御本を御覽ずれども、御覽じ出されぬなり。なほよくひき見よと仰せごとにて、求むるなり』とおほせらるるに、『九の巻のそこそこの程に待る』と申したりしかば、『あなうれし』とて、もてまゐらせ給ひき」とあるので、第四一段の場合にも、「これを見る人、あざけりあさみて、『世のしれ物かな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ』と言ふに、『我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを』と言ひたれば、前なる人ども、『誠にさにこそ候ひけれ。尤も愚かに候』と言ひて、みな後を見かへりて、『ここへ入らせ給へ』とて、所を去りて、呼び入れ侍りにき」でよく、「我が心にはと思ひしままに」は不要なはずである。ところが、実際にはこれが筆にされているのは、つとに内海弘蔵氏が『徒然草評釈』（明治四〇年九月刊）で、第四一段は内容的には自慢話なので、そうはとられぬようにとの配慮からのことと解され、近くも三木紀人氏が講談社学術文庫『徒然草』(一)（昭和五四年九月刊）の中で、「作者の含差をさりげなく示すものである」と説かれたように、含羞の気持が働いていることとしか考えられまい。ところが、前記したように、以下の「我等が生死の到来、……」の語気語調は説経唱導家の口振りを思わせる自信に満ちたものであって、含羞のそれとはとうてい考えられぬものである。だとすれば、「我が心にはと思ひしままに」

は、以下のことをふと思ひしままにはなく、鳥窠禪師と白楽天の問答の故事をふと思ひしままにということになるが、この故事を思い浮べながら、居所果卵の問答から無常の理の明示へと筆を転じているのは、筆執る兼好に創作意識が働いていることであつたのだろう。

如上の推論によつて指摘し得たと思う第四一段の中の創作意識を働かせての筆と思われる箇所を削り落せば、そのあとに浮び上る記事が、実は事実としてあつた当日の兼好のなまの体験であつたのではないか。当日の事実としてあつたと思われる事の推移を浮び上らせると次のようになるう。

- (1) 五月五日の賀茂の競馬を人（おそらくは二、三人の知友）と同車して見物に出掛けた。
- (2) 雑踏する群衆のため見えないので、牛車から下り、柵の所へ行くうとしたが、そのあたりは特に人が密集していて、中に分け入れなかつた。
- (3) ところが、馬場を隔てた向い側の木に男が登り、木の股に腰掛け、枝に取りつきながら、こっくりやり出し、落ちそうになるたびに目をさます奴がいた。
- (4) こちら側からそれを見ていた（兼好の前にいる）者たちが、なんと馬鹿な奴だと嘲笑した。
- (5) 競馬見物に来たもののよく見えない不満もあり、不快感もこうじてきていたので、兼好が、馬鹿なのはあちら様だけではない、死は今日明日かもわからぬ人の身で、競馬見物にうつつを抜かしているなんて、馬鹿なことはこちらだって同じさ、と、つい小声で言ってしまった。
- (6) ところが、思いも寄らず、前の人々がそのことばに反応し、本

当にそうですね、どうぞこちらへと、席をあげてくれた。見たくて来たものの雑踏でよく見えぬ憂さから口にしたことばであり、事の意外さにうれしくてならず、どうも有難うということ、たのしく競馬見物ができた。

事実としては、右の(1)と(6)を経験し、その日または後日、その経験を筆にする際、枕草子を介在させ、鳥窠禪師と白楽天の問答の故事で潤色し、(3)の向い側の「木」が「棟の木」になり、枝に取りつく「男」が「法師」となり、「これを見る人、あざけりあさみて、『世のしれ物かな』と言ふに」が事実であったのに、「世のしれ物かな」の下に「かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ」が加わり（これを加えたのは、白楽天の樹上にすむ鳥窠禪師に対するいぶかりと重ね、禪師と白楽天の問答の故事を読者人徒然草を献呈したのであろう特定の貴顕に思い浮ばせようとする意図に基づいてのことであつたらう）、さらに自分の小声での発言（小声ではなく、普通の声でだったら、群衆から追いつかれたであろうことは必定）を堂々たる説教のことばとして「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」と記させ、高まる感動、すなわち潤色しながら筆執るうちに高まってきた創作意識に突き動かされての心的高揚が、本段の最後を「かほどの理、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの、思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず」と、「人、木石にあらねば……」の名文句（この成句は『白氏文集』新楽府の「李夫人」の中にある）を含んでの得意満面の筆で結ばせたのではないか。事実としては、一日の、特異なではあるが、さして特筆大書すべきほどのことではない経験であつたが（ということは、事として

は、兼好にはなくしても起り得る出来事であつたということのだが）、それを枕草子と鳥窠禪師・白楽天問答の故事を介在させて、創作意図に基づき潤色したため、今見る章段のかたちでの記事となつたので、この記事どおりが事実としてあつたとすると、いかにも不自然な内容だということになつてしまつたのであろう。ところが、先学の本段に対する鑑賞・批評には、この不自然な内容を事実と受け取つたために、次のような勇み足的な言説が目につく。

兼好が群衆の嘲笑に無常の理をふと思いついた、その間一髪呼吸は、無常の理が外からの借りものや単なる詠歎ではなく、内から突きあげるものとして理念化していることを示すものである。この間の緊迫したリズムは、決して一片の思いつきや偶感のよくするところではない。一瞬の反射作用であり、身についているものの突発的な反応である。その意味ではこれを自覚的無常感と呼べるかとも思うが、とにかくここにわれわれは、仏者的な基盤に立つ兼好像をみる事ができるであらう。（小林智昭著『無常感の文学』昭和四〇年六月刊一九二ページ）

この話を讀むたびに、わたくしは、兼好のことば（「われらが生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮らす、愚かなることはなほまさりたるものを」）を耳に入れ「まことにさにこそ候ひけれ。もつとも愚かに候ふ。」とすなおに受け入れ、共感を示した人々に感動する。それらの人々がどのような身分の人々であつたか、「車の前に雑人立ち隔てて見えざりしかば、」とも「ことに人多く立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。」ともあることばから推して、おそらく当時の京都の庶民の群であつたのだらう。そこに中世と呼ばれる時代における、無常観の浸透の深さを思いみるのである。鎌倉

期における日本仏教の勃興も、こうした庶民層にみる無常観の浸透と、決して無縁ではない。(中川徳之助著『兼好の人と思想』昭和五〇年一月刊二〇七ページ)

なお、第四一段が事実そのままではなく、事実を潤色したものであったことは、兼好自身がいちばんよく知っていることなので、第二三八段の自讃の事七箇条の話(ここでの話は、すべて事実そのまま、事実を創作意図に基づき潤色している箇所はない)に第四一段を加えなかったのではないかとも思える。第二三八段は「御隨身近友が自讃とて、七箇条書きとどめたる事あり。皆、馬術、させることなき事どもなり。その例をおもひて、自讃の事七つあり」と書き起こしてはいるが、謙辞にすぎない。第二三八段の自讃七話の中には、第四一段より自讃の話としては不適なものが加えられている。第六話「賢助僧正に伴なひて、加持香水を見侍りしに、いまだはてぬほどに、僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都みえず。法師どもをかへして求めさするに、『同じさまなる大衆おほくて、え求めあはず』といひて、いと久しくていたりしを、『あなわびし。それ、求めておはせよ』といはれしに、かへり入りて、やがて具していでぬ」が、第四一段に比すれば、自讃すべき話として、その内容のはるかに貧弱であることは何人の目にも明白であろう。七話の「七」は近友自讃七箇条に基づくので動かせぬものであったろうが、その「七」の中で第六話と第四一段は入れ替えた方がよかったはずである。ところが、それが入れ替えられていないのは、第四一段が事実そのままではなく、潤色の筆の加わっていることを兼好自身がいちばんよく知っていたからのことではなかろうか。

『兼好自撰家集』には徒然草に披瀝された道念を裏切るかたちの

歌があまりにも多く見当ることを指摘したあと、徒然草の作品世界に言及して、「徒然草編集時の兼好の人間観と徒然草の作品世界」(国語と国文学昭和53・8)で、次のように論述した。

思えば、同じ六十代で編んだ自撰家集と徒然草が、道念の内容で比すると、黒白・正負の相違を示し、それが二つながら老いの今でそのまま書き残されていることは、徒然草だけが、また自撰家集だけが、老いの兼好の世界ではなかったことを確実に教えてくれている。徒然草の正の裏には自撰家集の負が張り付けられているのである。このことに気付くと、負の裏の見えぬときの正は確実に存在する実像であったが、それが虚像に転じてしまうのではないか。自撰家集もまた同じで、徒然草という反対世界がその裏側に張り付けられていることに気付くと、それに気付かぬときは実像であった家集が今度は虚像に転じてしまうのである。あるいは、摩訶止観の空・仮・中の三諦説を後盾にすることかとも思うが、徒然草も自撰家集も、それぞれがその裏に反対世界を持つ虚像という、この二つの虚像を虚像のまま、それを己れの人生の時々の必然の相として確実に把握するところに立っていたのが、六十代の兼好であったということになろう。

それにしても、若き日からの弛緩した道念をそのまま認容して、他人の読むことを予想した自撰家集に詠み残すということとは、それが自分にとって不利にはたらくことはわかりきったこととであり、普通ならしないはずのことなのに、あえてそれをしてるのは、次のような気持が兼好にはあったからではなかろうか。

晩年の兼好が、時の権力者足利直義に近づいて詠歌し、高師

直のもとに有職故実家として出入りしていたことは周知のことであり、権門に対する接近は、程度の差こそあれ、阿諛抜きには近侍しがたいものであつたらう。ところが、その生活を、今日の目からすると、かなりずぶとい神経で、游泳術巧みに続けながら、徒然草では、「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ」（三八段）、「いまだ誠の道を知らずとも、縁を離れて身を閑かにし、事にあづからずして心をやすくせんこそ、暫く楽しぶとも言ひつべけれ。『生活・人事・伎能・学問等の諸縁を止めよ』とこそ、摩訶止観にも侍れ」（七五段）と、平然として説示の言を書き付ける兼好には、僧本来のあり方において身を処し得ぬわが身のさを思つての自嘲的な劣等感とともに、その游泳術を肯定して、これが生きるということなのだ、これなしには生きていけないのだとする諦観と居直りを混在させた感情が首をもちあげていたのではなからうか。徹し得ぬのが人間なのだ、徹し切れぬからして「この世」なのであり、徹し切れぬことが「生きる」ということなのだ、とするこの人間観こそ、南北朝の時代精神を最もよくあらわしているように思うが、若き日からの弛緩した道念をそのまま認容して、自撰家集に詠み残させたのは、この人間観が兼好につよく働いたからではないだろうか。ということは、徹し得ぬ人間の燃えあがった道念（徒然草の道念）も弛緩した道念（自撰家集の道念）も、ともに虚なるもの仮なるものとして兼好には等価に見えていたということでもあろう。だから、徒然草の方の燃えあがる道念を書き残せば、自撰家集の方の弛緩した道念も詠み残したにすぎないということになる。ということは、次に説くが、兼好には、振返る自分の人生が、線のすが

たではなく、円のかたちで見えていたということなのである。

若き日から老いの今までを振返る兼好には、自分の言行の矛盾（徒然草の所説の矛盾については諸家のすでに指摘されるところであるが、兼好の生き方のいちばん大きな矛盾がここで問題にしている道心者としての言説と行動の間の矛盾である）がはっきり見えていたことであろう。と同時に、兼好の心には、その矛盾を必然のかたちで生きてきた己れの人生の抜き差しならぬ姿が感得されていたことであろう。己れのこれまでの人生の歩みは、向上の歩みであり、人間としての成長といえるものなのか否か、自分ではわからない。しかし、こう生きてきたことだけは間違いない事実である。この思いは、彼に己れの人生の必然の歩みを完結した全円的なものとして捉え眺めさせる。己れの生涯を、始め（徒然草第二四三段の父との思い出がこの「始め」であつたらう）と終り（徒然草編集時の現在）を結びつけて、ひとつの完結した円として捉え、その円の脇に立って、その円を思い、その円の中で、その時々には矛盾した行動をとりながらも必然のかたちでその矛盾を生きてきた自分を眺めているのが、徒然草編集時の兼好であつたのではないか。

徒然草の素材群には三十代の随感随想から六十代のそれまでがあるため、客観的に眺めると、徒然草には人間としての兼好の思想の遍歴なり思考の深化なりの跡が読み取れる。そこで、従前は、徒然草執筆時の兼好を人間としての兼好の成長の頂点に位置づけ、その頂点から己れの人生を振り返り、その思想遍歴の跡を詠嘆的無常観から自覚的無常観へのかたちで思いみた焦点二つの楕円体の世界、これが徒然草の世界なのだと考える西

尾実氏の御説に沿って徒然草の作品世界を捉えるのが常であったが、成長の頂点に立って己れの人生を振り返っているのではなく、成長とも深化とも縁のないかたち、前言した円のかたちで捉えられた己れの人生の一步脇なるところに位置して徒然草は編集されているのではなからうか。よそながら見る態度、「何事も入り立たぬさましたるぞよき」(七九段)とする生活信条も、この兼好の立つ位置と深く関係していることであろう。

人間としての成長の頂点からの回顧というかたちで徒然草を読み捉えようと、兼好には、振り返る己れの人生が一本の線のかたちで捉えられていたかに思われやすい。従前は、線的に登り詰めた人生の頂点から己れの歩み来たった人生の道を回顧したのが徒然草なのだと考えての発言が多かったように思う。しかし、始めもなければ終りもなく、高みも低みもない世界、それ故にこそ、矛盾こそ人間存在そのものと捉え、その時々、あとになれば迷妄としか思えぬ生き方も、その時々においては、一回限りの抜き差しならぬものとして己れの人生の歩みを振り返ったのが徒然草の作品世界であったと思うのであり、徒然草は登り来たった現在点から一本の線としての己れの人生を振り返った作品ではなかったように思う。徒然草の各章段を兼好の人生遍歴思想遍歴の上に並べ直せば、若き日の随感随想が比較的徒然草の前の方に配置されていることもあり、詠嘆的無常観から自覚的無常観へのかたちで徒然草を読み取ることも可能であるが、徒然草編集時の兼好の思いで捉えると、成長深化とは無縁なすがた、すなわち、前言したように、完結した円のかたちで徒然草の作品世界を捉えることこそが、兼好自身の思いに合致しよう。(三七〜三九ページ)

序段で、「心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば」と兼好自身が明記しており、徒然草が随筆であることは自明のこととしている今日の国文学常識に対して再考を促し、前記拙論(国語国文昭和49・11)の中で、次のように記した。

久保田淳氏は『諸説一覽徒然草』の中の「出典・源泉・先蹤」の項で、徒然草に影響した先行作品を周到な用意のもとに数えあげ、重要な箇所では、徒然草と先行作品の本文を対比させて、精細な検討を加えておられる。氏の検討の跡をたどると、先行作品の該当箇所すべてが徒然草執筆時の兼好によって徒然草に記されたとおりのかたちで暗記されていたものとは思えない。当然、先行作品の該当箇所をひらき、本文を確かめ直してから筆にした箇所が相当数あったはずであり、しかも、その多くは兼好自身のことばとして随感随想の中に入り組まれている。

その一部あるいは全部が虚構になる明らかな創作談もあり、他書を披見しての翻案もあり、しかも、それが兼好自身の体験談、あるいは自身の随感随想のかたちで記されているということは、徒然草の文学としての性格は単純に随筆と捉えたものでは捉え切れぬことを教えてくれている。随筆という枠を取りはずして、創作文学という面から徒然草を捉え直さねばならぬ時が次第に近づいてきているように思える。(一〇ページ)

第四一段が創作意識に突き動かされての筆であることは間違いない。随筆とは最も縁遠いと思われる創作意識の濃厚な章段が相当数徒然草の中に存することを見落すべきではない。徒然草の作品世界を円論で捉えた場合の枠組みの中に収まる序段を含めての二四四段

の各章段が、章段相互の間ではいかなる関係を保ちながら徒然草の全体としての作品世界を形成しているのか。完全なる説明は容易なことではあるまい。しかし、これが一歩々々解明されるとき、徒然草は今日のわれわれが目にし得ていると思っているものとは全く相異なる面貌を次第々々にあらわすに相違ない。

(注1) 徒然草の「き」叙述と「けり」叙述の差異を正確に捉えると、「き」叙述の記事は立て前として直接体験のかたちを取っているだけのことであって、叙述された内容が直接体験であるとは限らないこと、同様、「けり」叙述の記事は立て前として間接体験のかたちを取っているだけで、内容はもしかしたら直接体験のことであるかも知れないこと、このことについては「徒然草の中の兼好の直接体験を記し付けた章段に見当る不自然な内容についての考察」(国語国文昭和49・11)で説述した。

On Chapter 41 of *Tsurezuregusa*

Naoki HOSOYA

Abstract

It is generally said that Chapter 41 of *Tsurezuregusa* includes unrealistic elements, though it is written in a non-fiction style which makes it look as if it were Kenko's direct experience. This contradiction between the contents and the style has on occasion been discussed without any convincing solution. Some scholars even suspected that it might be a fiction after all, but they could not show any data to go on.

In this article I re-examine all the different readings by the different scholars on the chapter, and further my own understanding of its sentences especially by paying attention to their tones and strains. Then I compare the chapter with both the preceding and the following chapters, and consider its relation to the others. I also clarify in detail the several discrepancies between Kenko's real experience, as I can assume, as a spectator of a horse racing at Kamo on May 5th, and the written account of it in Chapter 41 which we can see now.

As a result Kenko's creative mind emerges, which will lead to the solution of the hitherto unsettled problem.

I argued some time ago the literary world of *Tsurezuregusa* by way of the Circle Theory. If we may postulate that each of the 244 chapters of *Tsurezuregusa* including the introductory takes its own position on a circle, the meaning of Chapter 41 will reveal itself.

Tsurezuregusa has constantly been treated as an essay. It is only when we are free from this limited category of literary classification that we can open up a new and fresh aspect of Kenko's world.

KEY WORDS

essay

隨筆

creative mind

創作意識

non-fiction

事實談

Tsurezuregusa

徒然草